

高エネルギー加速器研究機構主催
技術職員問題第2回意見交換会参加報告

センター系（応用化学科） 門脇良一
材料化学系（応用化学科） 小林隆夫

1. 研修期間・場所

期 間 : 2000年1月18日～20日
場 所 : 高エネルギー加速器研究機構（筑波）

2. 研修目的

本意見交換会は高エネ研主催だが、全国的に数多くの大学・研究所からの参加を得て技術部組織の実態や独立行政法人化問題での相互交流や意見交換を行う場となっている。全国的な状況を把握する目的で参加した。

3. 研修内容

標記意見交換会には、室蘭工大から門脇、小林の2名が参加した。討論会への参加は、25大学・高専・研究所から66名で、昨年が14大学・高専・研究所から33名の参加だったので、参加者数は倍増したとのことであった。

当初、室蘭からは初めてということもあって単なる参加というつもりだったが、1月13日に高エネルギー研の世話人から連絡があり、当初のプレゼンテーション予定者が欠席となったため、急遽室蘭工大の組織実態やできれば今後の方向を含めて報告してほしいとの要請を受けた。意見交換会の日程が切迫していたことでもあり、門脇、小林の判断で要請に応えることにした。

意見交換会は、当初（1）組織運営問題、（2）研修問題、（3）独立行政法人化問題の3課題に分けて討論する予定だったが、討論時間が短いこともあって組織運営問題と独立行政法人化問題の2課題での討論に変更された。

組織運営問題でのプレゼンテーションとして室蘭工大と核融合科学研究所から報告を行い、その後質疑や討論を行った。室蘭からの報告は、主には事前の高エネルギー研からのアンケートへの回答に沿った内容に、技官の再配置や昇格問題などを加えたものにした。報告への質問は、技術部運営委員会および技術部会議の構成メンバーとその選出方法ならびに会議の持ち方について、組織図の見直しが（簡単に）できるものなのかどうか、旅費に上限はあるのかどうか、組織化されて昇格等で前進したと考えているのかなどであった。差し障りのない程度に室蘭の現状を返答しておいた。核融合研からは小平課長が報告した。資料なしでのOHPのみでの報告だったので、記

憶が定かではないが、実際の業務実態の紹介が主であった。省令に基づく部課長制の業務組織であることから、権限・役割分担・責任等は明確なようである。技術開発費が相当額措置され、プロジェクト研究が主流ということもあるためか、技官の人事異動も進めている等との話だったように思う。

討論では、研究所関係は別にして大学・高専関係では技術部組織の実態が様々なため種々の意見や実態報告があった。N大学理学部では技術部のなかに人事選考委員会が設けられており、技術長および技術専門官は「公募制」で、業績や面接などで評価しているとのことであった。また、技術部として外部評価も受けているとのことであった。T大学工学部では「実際に動くための組織」として昨年からは専門職制度に対応した組織替えを行い、現在試行錯誤を繰り返しながら技術部運営を進めてきているとのことであった。また、A大学の付属研究所では、シヨップ制に衣替えしたところもあるとのことでした。一方では、対照的に大学に「技術部組織がない」というところや「技術部がないことになっている」との報告もあった。発言を聴いていると技術部組織を動かさないことにしているが、研修や技術発表会および必要に応じた意見交換を行っている大学が圧倒的であるような印象をもった。

独立行政法人化問題では、プレゼンテーションとして高エネルギー研の徳本氏が、独立行政法人化をめぐる現在の動きと高エネルギー研における検討経過と議論の内容等について報告した。高エネ研では、機構内の各研究所毎にワーキンググループを設けてこの問題について検討を進めてきたが、現在は機構全体としてのタスクフォースと各研究所・研究施設毎のサブタスクフォースに編成し直して検討を続けているとのことであった。また、技術職員問題については、機構タスクフォースの要請を受けて技術部サブタスクフォースをつくって議論を進めてきているということであった。仮に独立行政法人化された場合「技術部をどうするか」、「評価可能な組織にするにはどうすべきか」、「教官に研究の場を提供するために技官の責任分担を強化する」などの視点等から議論を進めているそうである。特に高エネ研では、独法化された場合技術職員のやっている仕事が外部委託される危険性が強いのではないかと危機感を強くもっているようであった。この課題での議論と問題意識は研究所関係の方が進んでおり、各大学・高専からの参加者は（私たちも含めて）研究所関係の話を拝聴するというので、あまり議論にはならなかったのが実情である。

公式の意見交換会としては、午後6時前に終了し、6時過ぎから懇親会という形で引き続き交流を深めた。アルコールが入ったせいもあるかもしれないが、こちらの方が各大学の実態等について詳しい話を聴くことができた。実は、懇親会の方が本番なのではないかと感じられるほどであった。以上、簡単だが報告文書とする。